

第13号 20円
昭和43年 5月25日

内容

日本経済の特質と理念	1
第7回財団法人評議員会	2
松下館の設計	3
卒業記念セミナー・大卒生共々	4
学生の心に生きるセミナー・ハウス	5
千人会に入りました	6
千人会に入りました理由	7
利用状況	8

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行
財団法人 大学セミナー・ハウス
《所在地》
東京都八王子市下柚木
電話 0426-76-8511-2
《東京事務所》
東京都中央区日本橋本町3の3
三井銀行本町支店ビル3階
電話 東京(270)4431
振替口座 東京 74590番
編集・発行人 飯田宗一郎
製作 中央公論事業出版

日本の経済は戦後二十年間に高度の成長をとげた。その成長率は年平均一〇%におよび、同じ第二次大戦の敗戦国であったドイツ、イタリーよりも著しく高い。その要因は何かという、先ず第一に為替管理、貿易の管理という管理の枠の中で成長した、つまり封鎖経済であったことによる。そこに国内需要に支えられて民間企業の旺盛な投資意欲があり、戦争中に欧米諸国に遅れた技術を、主としてアメリカから急速に導入して民間企業の設備を拡張していった。しかしその基本には経営者が経営管理能力を十分にもっており、更にいわゆる豊富にして質の良い比較的低廉な労働力があって、そこに投資されたものが産業としての効率的な効果をあげていくことになった。これに対して補完的役割を果たしたのが効率的な資金の供給である。これはある程度、貸出超過ということでも今も続いているが、現在までの高度成長においてはプラスの面に強く作用してきたといえよう。更に財政金融政策として、一方においては意識的な低金利政策、金融緩和と政策をとり、他方、財政においては、公債発行をしないという建前を貫いて民間経済の成長をはかってきた。またもう一つ大事なことは、資金の供給の面で主としてアメリカから色々な形において多額の借金をしてきたということである。また借金ができたということとは、日本の経済が良い

とか悪いとかいうことを別問題にして、現在、アメリカの経済に強力を結びついて、相当大きな依存をしているということにつながっている。こうして高度の経済の成長、発展を遂げた結果出てきたのが、経済規模の拡大、所得水準の平均的上昇である。国民総生産GNPは米、ソ、西独に続き第四位、今年に西独を日本が抜くかもしれないと予想されている。そして工業生産においては、既に米、ソに

とか悪いとかいうことを別問題にして、第二に企業の体質としてきた。企業の内容の改善がなかなからまくいかな。つまり借金をして企業の発展をはかってきたということ、不景気に対する抵抗力が弱く、とかく倒産が起りやすい体質が残されている。更に大きな問題は、卸売物価が横ばいに近いのに対して、消費者物価の高騰傾向である。消費者物価の上りが何故大きいかということは、高度成長の経済が速やかに成長した

日本経済の特質と理念



富士銀行頭取

岩佐凱実

続き第三位である。産業構造の重化学工業化も非常に進み、輸出入易の中に占める重化学工業製品の割合は六〇%近くになっている。これらのことは高度成長のいわばプラスの面といえるが、マイナス面はいわゆる歪現象で、第一に国民総生産に比して社会資本、つまり住宅、道路、交通等の問題に立ち遅れが目立ってきているし、産業構造の中においても農業、中小企業の面に構造的な立ち遅れが出

ことと密接な関連があるのであって、いわゆる人力を要するものが軒並から当然上ってくる。これがわれわれの消費生活の態様と密接に結びついていて、自然と消費者物価が上ってくるということにつながってくるのである。

次に日本経済の今後と課題について。第一に先程の封鎖経済体制が二、三年前から取り除かれて、開放経済体制に入ってきた。先ず三年前に工業製品については一部

のものを除いて貿易の自由化に踏み切り、貿易の自由化の方は西欧水準並になっている。ところが資本の自由化の方は、日本の産業を保護育成し、更に発展させたいという国内の経済的な産業政策と、国際的要請とが相衝突しておりここに色々問題があるのはご承知の通りである。いずれにしても開放経済体制ということになると、欧米先進諸国と垣根なしで自由な経済的な国際競争をして、今後の発展をはかっていかねばならない。第二は国際通貨体制の問題である。産業の面の国際体制においても、国際通貨体制においても、戦後の特長は必ずしも十分とはいえないが、国連、OECD、GATT、IMFといった国際的な協力関係ができてきていることである。昨年暮れのポンドの切下げ、それに伴うドル不安や金の価格の問題といったようなことから、ごく一部の評論家等の中には一九三〇年初頭のような世界的恐慌状態が起るのではないかと予想をする人があるが、これは経済的に今といったような国際協力がなかったというところ、現在においては曲りなりにもそういうものが世界的にできてきているというこの基本的な事実の相違をわれわれは認識しないといけない。そこでポンドの切下げについてであるが、現在のイギリスの経済の体質からいうと、切下げ幅が決して十分でなかった。(以下次頁下段へつづく)

第七回財団法人評議員会

昭和四三年三月二日・神田一ツ橋如水会館



新評議員会議長に、

慶応大学教授 高村象平氏



新監事には、

お茶の水女子大学長 藤田健治氏

松下館の名称をもって、

松下幸之助氏に感謝、全員賛成の決議

増田理事長、募金達成の報告をもって、佐藤喜一郎氏を讀う

〈重要案件〉

一、昭和四三年度経常部収支予算

三五、〇〇〇、〇〇〇円承認

二、共同セミナー落成式等新事業

計画承認

三、法人事務所八王子移転申請の

件承認

(昭和四三年四月九日 文部大臣認可)

評議員五八名のうち五〇名

(委任状による出席者三一名)

の出席を得て、午後三時半開催。

殊に今回は法人事務所所在地移転

という寄付行為の一部変更という

重要議案があり、三分の二以上の

出席を得たことは幸せであった。

予算案の中に千人会の寄付収入

を計上したが、茅誠司館長の

発言により、寧ろ特別会計とする

ことを至当と認め、それを除外し

総計三五、〇〇〇、〇〇〇円の予算

が成立し前年度予算三〇、八五五、

〇〇〇円に比し四百余万円の増と

なったが利用者増による収入増加

が主なる増収であり、支出の増は

待遇改善費と建設三年を経たため

の営繕補修費電力料などの需要費

の増加に支出される。

創立以来変らざる佐藤喜一郎氏

の募金に対するご苦労とご協力と

一億五千万円募金も目標近しい

増田四郎理事長の明るい報告、

松下電器産業のすばらしい寄付金

などそして千人会とはうまい考案

だといった笑題が多く、殊に齋藤

勇、山内恭彦両博士の如き大長老が現職の学長の中に交って、学者ならではかもし得ないすばらしい評議員会であった。久しぶりで大浜信泉前理事長も出席され一段とにぎやかであったが唯一人上代たの理事が健康すぐれず、お顔を見せられないのが淋しかった。

当日の出席者(順序不同、敬称

略) 増田四郎、茅誠司、大浜信泉、

團勝麿、手塚富雄、藤田健治、木

村健二郎、田上穰治、岡田謙、佐

原六郎、山内恭彦、齋藤勇、鎌田

正宣(代)、平塚益徳(代)、若林

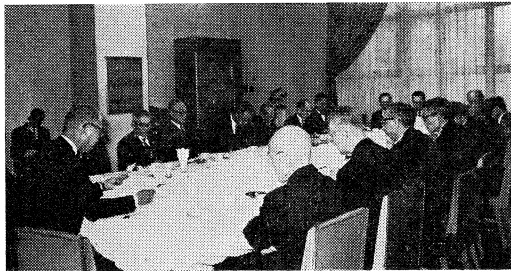
龍夫(代)、谷川徹三、岡田正弘、

松村定雄、飯田宗一郎

(最古の縁故者田上穰治、岡田

謙、佐原六郎三教授がくしくも顔

をそろえた)



評議員会会議風景

(一面より)

って余程、イギリスが建て直しを示してこない限り、絶えずポンドの価値は動揺せざるを得ない。一方ドルについても、よく新聞でドルの切下げがあるやなしやということがいわれるが、この問題を通貨対通貨の関係で考えた場合、あらゆる面でドルに対抗できる通貨はない。また金の価格の引上げという面から考えると、ヨーロッパ人には相当大きな問題であるが、日本は外貨準備の中に占める金がわずか三億ドル余りで、しかも全部流動しているか、担保にしているか、ねている金は一つもない。

そういうことで日本の経済は成長してきたわけで金には全く無縁であるが、ある意味で日本人は管理通貨体制のもとにおける経済の運営を心得ているといえよう。今後、国際通貨体制は、IMF機構の中のSBR(特別引出し権)が発動してくれば、一段と管理通貨的なものに移行していくだろう。

もう一つの問題は対後進国の問題である。先進工業国と後進国との間の経済の格差、国民所得水準の格差を縮める責任が先進工業国にあるというわけで援助をしているのであるが、後進国の方にそれぞれ経済の発展を阻む諸要因がある。一番の問題は一般に教育水準が非常に低く、豊富な労働はあっても悪質な労働しかない。また経営者に管理能力がないということ

で、いくら投資をしてもそれが少しも生きない。そこに後進国援助の非常なむずかしさがあるが、適当な経済指導をし、日本の場合、OECDの場で約束してあるので国民所得の1%を援助に向けていかなければならない。

最後に日本の経済として今後の成長力はどうかという点と豊富にして良質な、しかも低廉な労働力が漸次なくなってきたというところから、経済の成長力はやや鈍化せざるを得ない。しかし昭和四〇年代の成長率は、ここ数年間今のままの条件がそろってれば、特別な変化のない限り実質8%前後はいきうである。更に今後は経済の中の消費の割合が、三〇年代よりも若干大きくなり、民間経済活動はやや低下するであろう。

このような過程を経てであるが、日本はGNPがあれだけ伸びていったのに、一人当りの国民所得は未だ米国の四分の一であり、西独、英、仏と比しても約二分の一である。これは見方を変えたと、労働力の活用が無駄があるということ、従って労働力を効率的に活用するということが大きな課題である。日本人の経営管理能力、あるいは技術開発は相当高く評価してもよいと思うので、技術開発もまわりに諸条件を整えれば積極的に促進できるし、これを経済の発展につないでいくことができるのではないだろうか。

(卒業記念セミナーの講演概要、文責は編集者)

松下館の地鎮祭

を行なう

四月二日午前一〇時

待たれる一二月の落成

前号において詳しくお知らせしたように教師用宿舎をかけた学生の個別指導室と小セミナー室とを含む新しい建物が松下電器の寄付によって建築されることとなり、いよいよ設計も完了し、清水建設株式会社との間に契約を結び、四月一二日に増田理事長、長老教授山内恭彦博士その他工事関係者約五〇名が出席して小雨の中で厳かに執行。

松下館の設計について

昨夏竣工した講堂及び図書館に引き続き、この松下館の設計に当たっても、常に心にとめていること、それは全体との調和であろう。

セミナーいろは坂から本館。中央直線道路からサピス・センター、それから展開する一〇〇のユニット宿舎群。この敷地の自然の起伏にはめこまれたセミナー・ハウス全体の骨組はガッチリしてい

松崎義徳

る。その故に講堂や図書館、今度の松下館の設計に際しても、それぞれの建物の位置も、それから形迄もが、自然にあるべき処にびたりと、その位置と形に、はめこまれてゆく様に思われる。

ここ二、三年特に感じることはセミナー・ハウスの周辺の宅地造成が、急速に進み、緑の山はけずられ、谷は埋められ、いたるところ赤土の露出が、目につくようになった。セミナー・ハウスも施設が整い、建物が増えて、敷地が狭小になって来た。緑を少しでも自然に保っておきたい。

現在の緑、草や木を土と一緒に土中のもぐらや虫もそのまま持ち上げ、その下に建物を造ることは不可能だろうか？……。こういうイメージから出発した。キャンブファイアーの広場から、ゆるく延びている屋上庭園からは、歩きながら講堂や図書館、中央セミナー館は勿論、本館迄自然に目に入ってくる。しかしこれらの建物からは、ただ庭の緑と正面の富士が何の邪魔もなく眺められる。

この庭の下に九つの教授の研究室とサロン・会議室、二つの小さなセミナー室や便所、シャワー室等がある。このサロンからは富士が真正面に眺められる様に軸線が

施設拡充資金寄付者

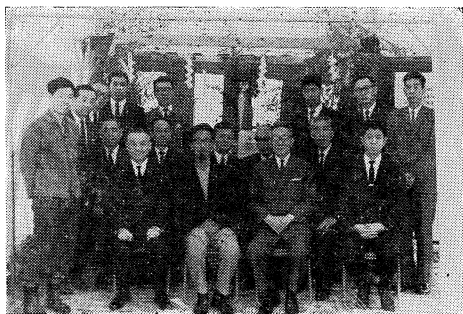
(第五回報告、昭和四三年一月)

三月)

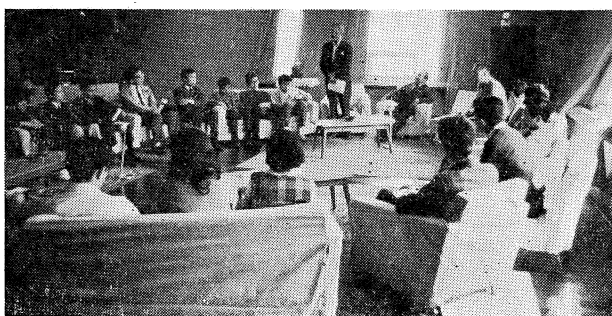
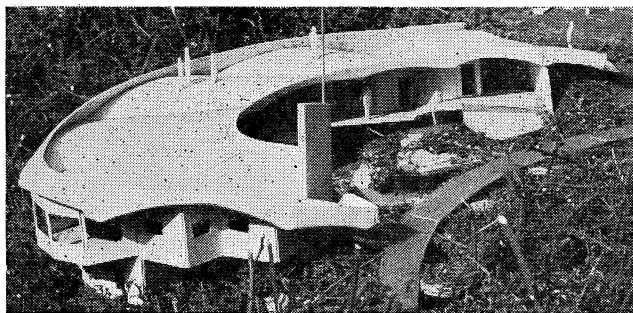
- 一、三〇〇円 成蹊大学佐藤ゼミ殿
 - 一、五〇〇円 東京女子大学 黒星ゼミ殿
 - 二、五〇〇円 早稲田大学 市川ゼミ殿
 - 一、〇〇〇円 早稲田大学教授 染谷恭次郎殿
 - 四、六〇〇円 早稲田大学 染谷ゼミ殿
 - 一、〇〇〇円 滝野川教会学校殿
 - 五、〇〇〇円 道徳科学研究所殿
 - 一、九〇〇円 松下電器 立川営業所殿
 - 一、〇〇〇円 早稲田大学助教 長谷川幸男殿
 - 三、〇〇〇円 日本大学教授 碧川道夫殿
 - 一、〇〇〇円 東電宇都宮営業所長 小出俊夫殿
 - 三、〇〇〇円 成蹊大学肥後ゼミ殿
 - 三、〇〇〇円 東京大学丸山ゼミ殿
 - 二、六九八円 日本キリスト友会 ヤングフレンズ殿
 - 一、〇〇〇円 学習院大英文科 シェクスピア劇殿
- 〔特別指定寄付〕
〔図書購入資金〕
- 五、〇四〇円 第一四回大学共同セミナー殿
 - 五、五一〇円 第一五回大学共同セミナー殿

野村学芸財団の奨学生と毎日新聞の藤田氏と東大松田智雄教授(四月二四日毎日新聞・余録・参照)

地鎮祭



松下館の模型図

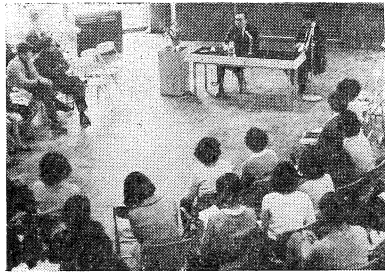


第十四回大学共同セミナー

〔昭和43年3月7、8、9日〕



斎藤勇先生と昼食



遠藤周作氏を囲む会

〈主題〉現代人とキリスト教思想

― 出会いと決断 ―

〈全体講義〉

A 現代思想とキリスト教 東京神学大学助教授 佐藤敏夫氏

B 現代日本の政治的状况 東京大学社研講師 有賀 弘氏

〈セクション別指導者〉

A 愛における自由の問題(ルタ

ー)

東京神学大学教授 北森嘉蔵氏

C 賭けと決断(パスカル)

東京女子大学助教授 小川圭治氏

D 現代人と不安(キルケゴール)

東京神学大学助教授 熊沢義宣氏

〈運営委員会〉

(委員長)

東京女子大学助教授 小川圭治氏

(委員)

上智大学教授 鈴木 皇氏

東京女子大学助教授 根岸愛子氏

〈参加学生〉

五四名(うち女子三五名)

日本女大(一四)、東京女大(六)、

早大(五)、青山学院大(四)、立

教大(三)、上智大(三)、都立大

(二)、津田塾大(二)、ICU

(二)、静岡大(二)、東大、電通

大、農工大、お茶の水女大、学芸

大、法大、武工大、北大、千葉大、

独協大、東外大各一名。

卒業記念セミナー

― 大学と社会を結ぶ最初の試み ―

〔昭和43年3月14、15日〕

〈主題〉講演に視野を開く

「日本経済の特質と理念」

富士銀行頭取 岩佐凱美氏

「日本人の生活と意識」

東京大学教授 隅谷三喜男氏

共同セミナーに参加した学生の中

には四年生も相当あるので、開

館以来最初の試みであるが卒業の

饞けの新しい形式ともなる記念

セミナーを実施した。卒業する学

生にとっては、大学セミナー・ハ

ウスは第二の母校であってほしい

のである。

大学と社会が最も望ましい関係

をつくり相互に要望し、信頼する

風潮をつくることは日本の現状に

おいて最も大切なことなので、遠

くから財界の指導者を眺めたり、

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

〈運営委員長〉 松田智雄氏

東京大学教授

〈セクション指導教授〉

早稲田大学教授 川原栄峰氏

東京大学教授 小城正雄氏

国際基督教大学助教授

小塩 節氏

学習院大学教授 児玉久雄氏

上智大学教授 鈴木 皇氏

東京大学助教授 西村秀夫氏

〈参加学生〉

八四名(うち女子四五名)

日本女大(一四)、早大(一二)、

東京女大(七)、青山学院大(七)、

東大(五)、武工大(五)、立教大

(三)、明大(三)、慶大(三)、学

習院大(三)、東工大(二)、津田

塾大(二)、共立女大(二)、神奈

川大(二)、独協大(二)、東外

大、農工大、電通大、中大、成蹊

大、日大、明治学院大、立正大、

聖心女大、昭和女大各一名、そ

他二名。



夕食後の楽しい集い



卒業記念セミナーの先生たち

学生の心に生きるセミナー・ハウス

卒業する者の感想

一人で歩ける

新石 正弘

半年振りにセミナー・ハウスに

来しました。そして隅谷先生の講義を聞いてキビシイと思いつつも、やっぱり来てよかったと思えました。今の大学生は「社会青年」で、一人で本を読んだり考えたりするよりも、集団の中で考え、あっちこっちに出かけ、ダメなことが好きなようにだと先生が話されましたが、自分を振り返ってみるとまさにそうです。でもここに来ると本当に素直にさまざまな問題が語り合え、そしてそこから帰るときは何かしら元気が出るから不思議です。しかしこれは自らに対する戒めでもありませんが、行って話し合うことだけで終ってほしくない。やはりあのオアシスのような丘を下り、一人で歩かねばならないと思います。最後に一つ提案したいと思いますが、それはセミナー・ハウスが、「上品」なテーマのもとに「優良

学生」が集まり特定の傾向を持つようになるのでは、という一部の心配を吹き飛ばすためにも、二年に一度ぐらい、学生の企画による共同セミナーをやったらどうでしょうか(第六回共同セミナーで既にそれが行なわれたと聞いていますが)。文句ばかりいって何もしない学生が、わがままを書きました。

わずかな期間ではありましたが私が大学セミナー・ハウスを通じて得たものは、大学四年間で得たものうちでかなりの部分を占めました。もしセミナー・ハウスがなかったらと考えると、つくづく私は幸せ者だと思えます。

今後とも大学セミナー・ハウスがいつまでも日本の大学の理想郷として発展し続けるよう願ってやみません。

(東京大学機械工学科四年)

卒業記念セミナーに参加して

深海 肇代

私がこのセミナーに求めたものは、少々文学的な表現にはなりませんが、卒業を目前にして自己の内を生じた、一種の絶望、空白と

もいふべきものの解決であったと思います。しかし、当然の事ながらそこで得られたものは、その絶望のより深い理性的かつ原理的な認識にほかなりませんでした。私達学生が、世に出ていくにあたって感じる不安には、一つの共通の背景があると思われませんが、人によって、それは様々の形で表われるでしょう。



美しいアメリカミズキの花 (東大農学部寄贈)

私の場合、この絶望や空白の根源をつくっていたものは、自己の内です。価値の相対化であったと思います。すなわち、自分が過去四年間の大学生活を通じ、追求し、形成してきた一つの思想が、私の中で絶対的な価値を失い、他の諸価値と同様の位置にひきおろされたといえることができそうです。同時に、私の観念的、非現実的な、ちょっとした価値感、現

実に接した時、いとも簡単にくずれていきました。セミナーに参加していくうちにも、この空白は、より深くなっていくわけでした。

だがそれにもかかわらず、このセミナーで私の救いとなったのは先生方の人間として可能な限りの暖かさであり、純粋さであり、また誠実さであったと思います。人間に不信をもつ私には、この現代の社会での相当苦悶な体験を得てきたであろう先生方が、猶かつある明るさと、一種の精神的透明さともいふべきものを持っておられるのを、不思議とさえ感じます。それは多分先生方が持つていらつしやる信仰の故であろうと思えます。

大学セミナー・ハウスに話を移すなら、飯田先生をはじめとしてこのような善意の、誠実な方々の精神によってのみ支えられているセミナー・ハウスの今後に、私は多くの不安を感じます。最も重要なことは、このセミナー・ハウスの精神を現実に支える経済的基盤の確立であると思いますが、それをどう確保するかは非常に難しい問題でしょう。

最後に、セミナー・ハウスが、常にその時点に於ける、最も重要な問題を、様々な視点から原理的に掘り下げていく姿勢を持ち続けていられることを心から祈って、この文を終りたいと思います。

(東京女子大学社会学科四年)

在学生の反響

出席して考えること

浅香 緑

今回のセミナーのテーマは、私からみると全ての問題を含んでいくように思え、期待するものが非常に多かった。自分の心の内にあってどうしてもそれを顕在化できず、中途半端な位置にいることに焦りと不安と不満を感じていたのが、非常に少しづつではあるが、今私は何を考え、何を明らかにすべきなのかが、このセミナーではっきりしてきた。

(立教大学三年)

信頼と賭け

浅岡 鏡子

私自身はクリスチャンではなく、通俗的な宗教観を持っていたのだが、自らを信仰の中においておられる先生方のお姿を拝見して客観的でない、信頼をして賭けをするという信仰の根本が、今私に圧倒的に迫ってきている。また自分自身の中に「賭け」という概念は位置づけられていないが、これから聖書を十分に読み、何かをつかんでいきたいと思う。そうした意味でこのセミナーという一つのきっかけを、これからの生活の中に生かしていきたいと思う。

(日本女子大学二年)

千人会 — 心強い善意の協力 —

第二回申込報告(申込順)

A	大学セミナー・ハウス職員	慶応大教授	高島	善哉殿	C	東京大学教授	石川吉右衛門殿	A	日本女子大学教授	遠藤	卓夫殿	C	東京女子大学教授	藤永	保殿				
B	住友金属鉱山会長	武蔵工大教授	植村甲午郎殿	好殿	B	東京大学教授	岡村	總吾殿	B	早大教授	川本	茂雄殿	C	早大専任講師	石川	孝夫殿			
A	神田精養軒社長	東大名誉教授	杉山	好殿	C	ICU学長事務取扱	久武	雅夫殿	B	早大教授	赤松	秀雄殿	C	早大教授	加藤	一郎殿			
B	中野電機製作所	慶応大教授	岡本	定次殿	A	早大教授	松井	源吾殿	C	立教大学教授	山口	俊夫殿	C	立教大学教授	大畑篤四郎殿	C	早大教授	山田	次郎殿
C	早大助教	東洋大学教授	飯島	宗享殿	C	早大教授	岩崎	愛子殿	C	立教大学教授	中川	重雄殿	C	立教大学教授	田邊留次郎殿	C	早大教授	川原	栄峰殿
B	興和会右田病院長	慶応大教授	齋藤幸一郎殿	宗享殿	B	早大教授	白井	常殿	B	早大教授	新澤	雄一殿	C	早大教授	戸塚	元吉殿			
A	仲野電機製作所	東大名誉教授	祖父江	寛殿	C	立教大学教授	松井	實夫殿	C	立教大学教授	野田	一夫殿	C	立教大学教授	小林	善彦殿			
C	青山学院大学講師	東工大教授	市井	三郎殿	C	立教大学教授	松尾	弘殿	B	早大教授	齋川	仁殿	C	立教大学教授	後藤	米夫殿			
A	大映株式会社社長	東大教授	山崎	俊雄殿	C	立教大学教授	松尾	弘殿	A	立教大学教授	野田	一夫殿	C	立教大学教授	後藤	米夫殿			
B	東京芝浦電気社員	東大教授	赤	撰也殿	B	早大教授	岡島	真理殿	C	立教大学教授	坂本	清殿	C	立教大学教授	井上百合子殿	C	立教大学教授	鶴川	馨殿
A	朝永振一郎殿	早大教授	和歌森太郎殿	撰也殿	B	早大教授	伏見	弘殿	C	立教大学教授	伊沢	計介殿	C	立教大学教授	長岩	寛殿			
C	セーラー万年筆社長	早大教授	榎山欽四郎殿	撰也殿	B	早大教授	加藤	六美殿	C	立教大学教授	西村	秀夫殿	A	立教大学教授	新井益太郎殿	C	立教大学教授	成蹊	誠陸殿
C	オリエンタル酵母工業会長	早大教授	村上菊一郎殿	撰也殿	B	早大教授	宇野	義方殿	A	立教大学教授	田上	稔治殿	C	立教大学教授	佐藤	弦殿			
C	東京大学教授	早大教授	三井	為友殿	B	早大教授	山本大二郎殿	有賀	弘殿	C	立教大学教授	平澤	薫殿	C	立教大学教授	大西	清殿		
C	青山学院大学助教授	早大教授	木村	増三殿	B	早大教授	岩崎	力殿	A	立教大学教授	手塚	富雄殿	C	立教大学教授	岡村	勝殿			
B	一橋大学教授	早大教授	松延	博殿	A	立教大学教授	植田	捷雄殿	A	立教大学教授	岡田	謙殿	C	立教大学教授	大河内	眺男殿			
A	武蔵工科大学長	早大教授	今井	淳殿	B	立教大学教授	一松	信殿	A	立教大学教授	池田	貞雄殿	C	立教大学教授	土屋	哲殿			
A	一橋大学名誉教授	早大教授	本間	仁殿	C	立教大学教授	榎原	繁雄殿	B	立教大学教授	篠沢	秀夫殿	C	立教大学教授	篠原	泰三殿			
A	一橋大学名誉教授	早大教授	笠松	章殿	C	立教大学教授	浅川	淳殿	C	立教大学教授	増田	茂樹殿	A	立教大学教授	原口	隆英殿			
A	一橋大学名誉教授	早大教授	西村	敏男殿	C	立教大学教授	芳山	邦弘殿	C	立教大学教授	高橋	幸雄殿	B	立教大学教授	高村	象平殿			
A	一橋大学名誉教授	早大教授	西村	敏男殿	C	立教大学教授	芳山	邦弘殿	C	立教大学教授	高橋	幸雄殿	B	立教大学教授	高村	象平殿			



千人会に入った私の理由

——大学生活と夜の効用——

田内 幸一

千人会に入った理由は、端的に言えば、夜の大学生活を与えるものがこの大学セミナー・ハウスであると考へ、その夜の大学生活を少しでも多くの大学生諸君に味わって貰いたいと思ったからです。もとより私の献じたのは全くの貧者の一灯で、このような目的にどれだけ役立つかは疑問ですが、とにかく私の考へていることはこれです。

さて夜の大学生活というと、あまり耳慣れない表現ですが、今の日本の大学生生活に全然ないものがこれなのです。先生も学生も昼間、大学に来て、日暮れになれば皆家に帰ってしまふ。これは全く当り前の話で、こんなことを改めて問題にするのがおかしいようなものですが、実は私がシカゴ大学に二年間留学したときに感じたのは、大学は夜も生きていなければならぬということでした。アメリカの大学の中でもシカゴ大学

は、先生も学生もほとんどが大学のキャンパスの中か周辺に居住していることが特徴で、学生達は他の大学のことを通勤大学と軽蔑しているところだから特にそうだったのでしょうか、私のいた経済学部では木曜の夜に外部の講師を招いて講演会を催し、それには奥さん同伴の先生や学生が大勢出席し、講演会のあとでは、講師と親しい先生のお宅でちょっとしたパーティーがあり、夜遅くまで議論をする、ということがあり、その他大学の講演会では一般的な問題についての講演会とか、コンサー

ト、劇などがあり、大学関係の人間がそれぞれ自分の好む催しに出掛けるという状態でした。キャンパス・ライフという言葉は知っていても、その本当の意味を肌で感じたのはこのような雰囲気の中においてでした。そして、自分のこれまでの学生生活を振り返ってみて、何と貧しい、淋しい学生生活であつたらうかと思つづく考へ込んだものでした。

夜というのは不思議なもので、何となく寛いだ気分をもたらしませう。このような気分の下で、先生と学生とが交流するということとは、明るい太陽の下でのそれとは全然違った色合いをもちます。つまりプライベートな雰囲気ということですが、しかし今日の日本の大学のキャンパスで夜の交流は無理でしょう。とすればそれを与えうるのはこの大学セミナー・ハウス

であると私は考へたわけです。たとえば新しくできた講堂で、学生諸君と室内楽のコンサートでも聴けたら、どんなに楽しいことでしょう。そしてその後で感想を語り合えたら。

(一橋大学助教授)



寄贈図書

(昭和43年1月~3月)

「経営学の解明」第一、二巻 島袋 嘉昌殿

「スタンダード仏和辞典」 「スタンダード仏和小辞典」 「現代フランス文法」 大 修 館殿

「新スタンダード和英辞典」 朱牟田夏雄殿

「歴史の研究」第五巻 佐藤喜一郎殿

「コモン・センス」 小島 憲正殿

「政治」 有賀 弘殿

「宗教改革とドイツ政治思想」 八王子市役所殿

「八王子市史」附編 八王子市役所殿

「中空スラブ構造」 松井 源吾殿

「軍縮問題資料集」 松井 源吾殿

国際問題研究所殿

大学共同セミナー(予告)

◇新入学生歓迎共同セミナー

〈主題〉

学問と人生

大学と現代人の課題にふれて

〈期日〉

昭和四三年六月二八・二九・三〇日

全体講義(私の学問的体験)

東京大学名誉教授(自然科学)

坪井 忠二氏

一橋大学教授(社会科学)

板垣 與一氏

運営委員長 学習院大学教授

児玉 久雄氏

〈セクション指導教授〉

学習院大学教授(英文学) 児玉 久雄

国際基督教大学助教授(独語・独文学) 小 塩 節

上智大学教授(物理学) 鈴木 皇

東京大学助教授(仏文学・比較文学) 芳賀 徹

立教大学教授(憲法学) 久保田きぬ子

東京大学助教授(人文地理学) 小堀 巖

東京工業大学助教授(土木工学) 鈴木 忠義

一橋大学助教授(社会経済史) 深沢 宏

〈ゲスト〉

評論家 坂西 志保

富士製鉄社長 永野 重雄

(依頼中)

◇音楽と社会(連続十回予定)

M・ウェーバーの音楽社会学をテキストとして

〈指導教授〉

社会科学と音楽

成蹊大学教授 安藤 英治氏

(六月七日、六月一四日)

西欧の音組織の基礎理論

東京女子大教授 池宮 英才氏

(六月二八日、七月五日)

音組織からみた音楽史

東京芸大助教授 服部 幸三

東京芸大助教授 小泉 文夫

桐朋大学助教授 角倉 一朗

編集後記

来りて見よ(come and see)とは聖書の言葉であるが、四月二日に野村学芸財団の奨学生約六〇人と同行された毎日新聞余録子藤田信勝氏は、日本の大学教育の中における大学セミナー・ハウスの存在価値とその自然的学問的環境をその眼で確め、四月二四日付の余録欄全文を費して書いてくれた。その英敏な着眼に私は敬意を表した。そしてここにもファンが一人できたことを喜んだ。余録子をもつてしても来て見なければわからないのである。

真実ほど強いものはない。(飯田宗一郎)

●利用状況

◆一月

成蹊大学教授 佐藤 庸
成蹊大学内現代賃金問題研究会

慶応義塾大学講師 森 敬
東京女子大学助教授 黒星 瑩一
東京経済大学助教授 向井 武文
東京女子大学助教授 小川 圭治
東京大学助教授 菊地 昌典
慶応義塾大学講師 師岡 考次
神学セミナーの会 佐藤 敏夫
日本大学教授 阪本 泉
中央大学教授 本間 郁男
玉川大学教授 戸川 尚
聖心女子大学教授 広瀬京一郎
法政大学助教授 尾形 憲
日本機械学会生産管理研究会 遠藤 卓夫
日本女子大学教授 小島 美子
東京芸術大学講師 谷 俊治
東京学芸大学助教授 大木 英夫
滝野川教会 森 敬
慶応義塾大学講師 日興証券(管理者講習) 三菱レイヨン(社員教育)

東京教育大学助教授 関口 武
上智大学助教授 平井 久
明治学院大学教授 大橋 薫
共立女子大学講師 林 勉
東京工業大学教授 阿武 芳朗
道徳科学研究所 小峰 忠一
立川短期大学講師 吉田 幸弘
日本女子大学教授 杉溪 一言

日本ルーテル神学大学 日興証券(営業管理者講習)
慶応義塾大学助教授 安藤 常也
ルーテル英語学校 W・ホームズ 東京大学学術調査探検部
慶応義塾大学教授 沢田 允茂
日野自動車経営者連盟(安全衛生委員会) 松下電器産業(人事管理研修会)

武蔵工業大学教授 酒井 勇
東京学芸大学助教授 斎藤 耕二
青山学院大学講師 浜辺 達男
日本機械学会生産管理研究会 目白学園女子短期大学助教授 中山 昌

慶応義塾大学教授 小川 隆
上智大学講師 小林 宏展
立川短期大学助教授 島袋 嘉昌
明治大学講師 河野 一英
東京工業大学教授 佐藤 和郎
専修大学助教授 柘植 敏治
立教大学講師 川西 誠
日本大学教授 宮崎 申郎

早稲田大学講師 松田 信男
東京都立大学助教授 竹内 幹敏
東京都立大学助教授 二村 敏子
東京経済大学助教授 荒川 幾男
工学院大学助教授 長坂 舜二
東京経済大学助教授 依田 精一
慶応義塾大学助教授 片桐 邦郎
立正大学助教授 折下 功
立正大学助教授 杉沢 新一
一橋大学小平祭実行委員会 近藤 基吉
東京都立大学助教授 北田 芳治
東京経済大学助教授 山下 栄一
上智大学講師 山下 栄一

三菱レイヨン(社員教育) 山城 章
一橋大学教授 一橋大学教育研究会 天利 長三
東京都立大学教授 三井物産トールサービズ株式会社(技術研修) 日興証券(営業管理者講習) 野村 好弘
東京都立大学助教授 東京基督教大学助教授 丸山吉三郎
成蹊大学助教授 三沢 一
法政大学助教授 尾形 憲
成蹊大学教授 肥後 和夫
明治学院大学助教授 吉田 裕
早稲田奉仕園 清水 誠
東京都立大学助教授 三国コカ・コーラ(新入社員教育) 松下電器産業(経営セミナー) 荒木 峻
東京都立大学教授 日本機械学会(生産管理セミナー) 神品 芳夫
日本大学助教授 日本大学文理学部写真研究会 一番ヶ瀬康子
上智大学教授 鈴木 皇
慶応義塾大学教授 水野 正夫
東京教育大学助教授 外山滋比古

立教大学教授 高橋 昭三
日本女子大学講師 古沢 頼雄
東京大学教授 松尾 孝嶺
ルーテル英語学校 W・ホームズ 植手 通有
東京女子大学助教授 丸山 真男
東京学芸大学助教授 小泉 文夫
地学研究会 小泉 文夫

早稲田大学テレビ芸術研究会 三国コカ・コーラ(新入社員教育) 横濱国立大学助教授 宇田川璋仁
青山学院大学講師 田村 武夫
中央大学教授 高窪 利一
共立薬科大学教授 宮本 貞一
横浜国立大学助教授 伊藤 忠彦
法政大学教授 栢野 晴夫
明治学院大学助教授 神保 信一
都立商科短期大学講師 石井 良明
共立女子短大教授 青山 誠子
中央大学僻地児童教育研究会 高橋 詞
東京大学教授 アメリカンワールドサービズ日 本協会 霜山 徳爾
上智大学教授 湯浅 欽史
東京都立大学助教授 慶応高校ワグネル・ソサエティ 慶応女子高校ワグネル・ソサエティ 横濱国大経済学部ゼミナール委員会 大内 英吉
日本大学助教授 日本キリスト教団 新沢 雄一
早稲田大学教授 工藤 篁
東京大学教授 日本ワールドシップ・アンシエイション 慶応義塾大学(ラポラトリー・トレイニング) 松田 武彦
東京工業大学教授 小泉 文夫
東京学芸大学助教授 立教大学経営管理研究会 東京キリスト教短期大学学長 D・E・ホーク

早稲田大学教授 井上 勇
青山学院大学第二部宗教部 長谷川 博
法政大学教授 東京大学柏森舎聖書研究会 東大セツルメント法律相談部 山岡喜久男
明治大学講師 山岡喜久男
東京都立大学助教授 山本 和代
日本聖公会学生キリスト教連動 立教大学助教授 高昌 通敏
東京都立大学助教授 板津由基郷 日本大学法学部二部新聞学会 関口 晃
東京大学助教授 岡村 総吾
早稲田大学講師 原 増司
日本土木系学生会関東地区 学習院大学教授 児玉 久雄
日本ヤングフレンジ 南三鷹教会 泉 暹
国際商科大学講師 成蹊大学教授 木村 久男
明治大学教授 藤芳 誠一
明治学院大学グレゴリー・バンド 東京学芸大学助教授 麻生 誠
東京女子大学助教授 黒星 瑩一
日本大学助教授 石川 才顕
明星大学排球部 慶応義塾大学ビジネス・スクール 専修大学助教授 望月 清司
日本大学講師 蒲生 郷昭
東京都立大学助教授 北沢 右三
松下電器産業立川営業所(関係会社人事管理訓練) 世田谷基督教教会学校 東海大学助教授 谷田 義久

二月

三月

日本ルーテル神学大学 日興証券(営業管理者講習)
慶応義塾大学助教授 安藤 常也
ルーテル英語学校 W・ホームズ 東京大学学術調査探検部
慶応義塾大学教授 沢田 允茂
日野自動車経営者連盟(安全衛生委員会) 松下電器産業(人事管理研修会)
武蔵工業大学教授 酒井 勇
東京学芸大学助教授 斎藤 耕二
青山学院大学講師 浜辺 達男
日本機械学会生産管理研究会 目白学園女子短期大学助教授 中山 昌
慶応義塾大学教授 小川 隆
上智大学講師 小林 宏展
立川短期大学助教授 島袋 嘉昌
明治大学講師 河野 一英
東京工業大学教授 佐藤 和郎
専修大学助教授 柘植 敏治
立教大学講師 川西 誠
日本大学教授 宮崎 申郎
早稲田大学講師 松田 信男
東京都立大学助教授 竹内 幹敏
東京都立大学助教授 二村 敏子
東京経済大学助教授 荒川 幾男
工学院大学助教授 長坂 舜二
東京経済大学助教授 依田 精一
慶応義塾大学助教授 片桐 邦郎
立正大学助教授 折下 功
立正大学助教授 杉沢 新一
一橋大学小平祭実行委員会 近藤 基吉
東京都立大学助教授 北田 芳治
東京経済大学助教授 山下 栄一
上智大学講師 山下 栄一